



Title	農村における青年層の農業観とその背景
Author(s)	原田, 淳
Citation	農業経営研究, 17, 43-56
Issue Date	1991-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36473
Type	departmental bulletin paper
File Information	17_43-56.pdf



農村における青年層の農業観とその背景

原田 淳

はじめに

- 1 農業経営主の意識
- 2 農村における青年の職業観
- 3 職業選択と職業観
- 4 居住地の選択と職業観
- 5 結論

おわりに

はじめに

農業経営研究の動向として、これまで要素論・組織論をめぐる議論が主流といえる位置にあったが、近年、管理論に関わる議論がその位置を高めている。現実には、従来、組織論の手法が手詰まり状態にたち至ったという側面もあるが、しかし組織論的な論議の一定の進捗によって、組織を編成する主体の機能を扱う管理論的分野の重要性がいっそう確認されるに至ったという側面も無視できない¹⁾。つまり、農業経営研究全体にとっても、管理論的分野、中でも主体に関する研究の進展がよりいっそう重要になってきていると考えられる。

経営者の意志決定を扱う管理論的分野の中でも、経営者の能力や資質に関する議論が脚光を浴びてきている。これには、要素論・組織論の成果だけでは意志決定に関わる問題を解ききれないなかで、第4の要素として経営者の資質に注目するという側面がある。この場合、経営者の資質に注目するといったとき、その形成・育成といった側面が主に取り上げられてきた。これまで「農業生産はあっても農業経営はない」とか「農家は企業者ではなく単なる業主である」といわれてきたなかで、

企業的農業経営とその経営主体の育成・確立の方策が模索されてきたことが、その背景となっていると考えられる²⁾。従ってそこでは、資質といった場合に、経営者の具備する能力や機能が研究の対象となってきた。このような対象は、経営の要素や組織と密接な結びつきを抜きには分析し得ない。しかしながら、そう行った経営の状況とは離れたところで形成される経営者のキャラクターが意志決定に及ぼす要因も決して無視できないものと思われる。

しかも近年、農業を取り巻く状況が激変しつつある中で、農業生産の担い手の高齢化が進むとともに後継者の減少する傾向が強まり、またその一方で、農村が本来持つ諸機能について、改めて見直すべく議論が出てきているなかでは、経営者の資質として求められるものも変化してきているばかりでなく、担い手をどう確保していくかが切実な問題となってくる。こうした背景のもとでは、要素論や組織論との結びつきのなかだけでは、有効な回答を見いだせない。より、人格的な部分への接近が必要になる³⁾。

農業経営研究の面からも、要素論・組織論から距離のあるこうした人格的な面が大きな作用をおよぼすなら、そのメカニズムを明らかにすることは大きな意味を持つ。しかしながらそのアプローチに際しては、経営者のキャラクターを与件としてしか扱えないのなら、現実に対する回答はなんら得られない。そうしたキャラクターがどのように形成されるのかに接近できてはじめて農業経営研究の中に位置づくといえる。

今回分析の対象としたN村は、十勝中央部に位置する畑作純農村であるが、昭和59年には農業機械銀行を中核とする地域農業システムで朝日農業章を授賞するなど、農業面での取り組みは全国的にも注目を集めている。この村のユニークな点は、こうした地域農業システムの形成過程において、昭和30年代に始まった全国的にも希な全村法人化運動を契機として、旧来の農事実行組合を単位とする農村から、個々の農家や個人を単位とする新しい農村づくりが行われてきたことである。農協運営は個人参加による部会を核とし、農協の生活購買部門を独立させ地域生協を設立しその運営は婦人と青年が中心になるなど、後継者層にも活動の機会が広く与えられており、各層にわたってその活動の活発な農村の一つであり、そのなかで担い手の確保や育成に一考すべきものがあると見られるのである。

1 農業経営主の意識

表1 経営の方針

	20代 1人	30代 前半 3人 後半 4人	40代 前半 8人 後半 5人	50代 前半 9人 後半 2人	60代 2人
規模拡大（面積・頭数）		1	1	1	2
労力投下部門の工夫	1		1	2	1
新規作物の導入・拡大		1	3	1	1
販路の工夫			2	2	
土づくり			2	1	3
品質の向上			1	1	
労力配分の是正	1	1		2	1
増収			1	1	3
経費の節減	1			2	3
現状維持		1	1		
負債の償還			1		1
規模縮小・資産処分					2

注）面接による自由記述式の回答を整理したものである

表2 農業のよいところ・わるいところ

年齢	よいところ	わるいところ
28	スリルがあって面白い	天候に左右され易い
34	魅力がある	
40	人に束縛を受けない 時間を自由に使える	
41	自分で作ったものを安心して食べれる	
42	気楽で思うとおりにできる	家をあけておくと鶏が全滅してしまう 疲労が激しい割に見返りがない 冬に働けない 何事も自分で責任を負わねばならない
43	自由である	
43	休みたいときに休めて気楽 作物を育てる喜びがある	
44	やってきたことに誇りがもてる	
46	自由があり社長のようにできる	先行投資が天候に左右されるのが不安 一か月ぐらいの休みがとりたい
50	時間に自由に好きなようにやれる	
51	好きなことをやって食べてこれた	
51		
54	自由で人に使われない	採算のあう農業は困難 自由に作物が作れない 経済的に不安定
56		
61	自由である 努力の見返りがはっきりしている	
65	時間的余裕がある	

注）面接による自由記述式の回答を整理したものである

表1は、経営主への面接調査にあたって自由回答式で聞き取った経営の方針を、内容と回答者の年代によって整理したものである。回答者によっては複数の項目にまたがる回答になっている。

この表を基に、経営の方針として考えていることについて整理すると、規模拡大や野菜の導入、あるいは労働力の積極利用を図るなどといった積極策と、経費削減に務め現状からの大きな変換は考えないとする慎重策に、大別される。積極策は40代前半までで比重が高く、慎重策は40代後半で比重が高い。また、労働の配分に関する回答が多いが、これももっと積極的に利用したいという積極派と、労働配分を見直してゆとりを持ちたいというゆとり派とに大別できる。いずれも、所得獲得を通して、あるいは時間の配分という直接的な形で、生活に結び付いた問題として提起されている。ここでも40代前半までが積極派に、40代後半以降がゆとり派に対応している。

経営の意志決定に直接関わる経営方針について、多様な回答が得られることは予想されることであるが、このように世代によって傾向が区分されるという点にここでは注目したい。経営の方針を実現するための方策を実際にどう実行するかという局面であれば、経営者の能力や備えている機能が重要な要因になる。しかし、その前段でどういう経営方針を打ち出すかという点に関しては、むしろ状況判断ということも必要であるから能力や機能も大きな要因であるが、経営者の考え方という、意識に関わる要因が大きく影響していると考えられる。

そこで、経営方針の背景にあると思われる、農業をどう感じているかについての意識を、表2にみってみる。全般に自由であることよさが多く回答されている。しかし、その自由の中身については、50代以上が「好きなようにやれる」「人に使われることがない」といった社会的な束縛のなさであるのに対して、40代以下では時間的なものが多くなっていることが特徴である。時間的自由の意識は労働力の積極利用を考える発想にもつながる。しかも、30代前半以下に「農業には魅力がある」「スリルがある」といった、より積極的な回答がみられることに注目するなら、若い経営主層には“自由さ”がより積極的に可能性として認識されて、積極的な経営方針となって現れていると見ることができる。

このように、経営方針を考える際に経営者の能力や機能といった要因もさることながら、意識というメンタルな要因が深く関わり、しかもそれが世代という属性を通じて現れていることが確認できる。つまり、個々の経営の状況を越えて、世代に共通する背景が意識の面に強く反映する部分のあることを示している。今後の担い

手の育成を考えるなら、このような個々の状況を越えて作用する要因が何であり、それがどのように作用しているのかを明らかにしておくことが求められる。

そのなかでも、今後の担い手として重要な位置にある青年層に、農業に対する積極的な意識のあることに注目できる。以下、このような青年層に注目して、積極的な経営方針の出てくる背景について、意識の形成過程に注目しながら分析を進めていく。

2 農村における青年の職業観

さらに以下では、N村の特徴を浮き彫りにするために、同じく農業を産業の基盤としながらも、稲作を主体とし兼業への傾斜の進んでいる空知管内のU町も調査対象として取り上げた。U町は、周辺の同じ様な稲作地帯で転作や米価引き下げへの対応として野菜などの集約的な作物の導入が進んでいる中で、そうして動きに遅れを取った、停滞的な色彩の強い地域と位置づけられる。事実、N村とは対比的に農業後継者の極端に少ない農業構造となっている。

ここでは、農村の青年の意識の特徴を社会的背景の違いから考察するために、農村の中でも農家と非農家での違い、農村でも専業畑作地帯であるN村と兼業稲作地帯であるU町との違い、さらに農村都市である帯広の非農家との対比、農業後継者としての専門教育を受けている農業大学校生との対比、を通してみていく。農業に対する意識を見る場合、ここで重要なのは農業に取り組む態度であるから、他の職業と比較するときには、職業に対する意識としてとらえる必要がある。このように問題を指定してアンケート調査を行った。

表3にあるように、現在の職業に対する満足度は、N村の農家が「十分満足」「まあ満足」の割合が高く、先にみた積極的な経営方針の背景としてもうなづけるものである。それに対して、U町の農家は「やや不満」「大いに不満」が半数を占める。非農家の場合「どちらともいえない」に集中するか「まあ満足」「やや不満」に分散する形となっている。農業大学校生は非農家に近い形となっている。

では、こうした職業に対する満足度の違いは、どのような要因によっているのだろうか。まず表4に示したように、現在の職業について感じる魅力から考察してゆく。ここでは、N村とU町での農家の傾向はほぼ共通しており、「やりがいがある」「努力が報われる」「自分の考えが反映される」が半数を超える高い回答率を

表3 現在の職業への満足度

単位：％

	N村 農家	N村 非農家	帯 広 非農家	U町 非農家	U町 農家	農業 大学校
十分満足	33.3	10.5	4.8	5.0	0.0	0.0
まあ満足	33.3	21.1	38.0	25.0	30.0	25.0
どちらともいえない	0.0	47.4	23.8	60.0	20.0	50.0
やや不満	33.3	15.8	33.3	10.0	30.0	20.0
大いに不満	0.0	5.3	0.0	0.0	20.0	5.0

表4 現在の職業の魅力

単位：％

	N村 農家	N村 非農家	帯 広 非農家	U町 非農家	U町 農家	農業 大学校
魅力を感じない	0.0	5.3	23.8	0.0	0.0	30.0
やりがいがある	83.3	21.1	19.0	20.0	60.0	45.0
自分の考えが反映される	66.7	15.8	14.3	10.0	90.0	30.0
努力が報われる	50.0	5.3	0.0	15.0	50.0	25.0
自分の特性が活かせる	16.7	15.8	14.3	20.0	30.0	25.0
仲間が楽しい	33.3	47.4	14.3	35.0	30.0	15.0
仕事楽しい	0.0	15.8	23.8	0.0	0.0	15.0
仕事が楽である	0.0	15.8	23.8	25.0	10.0	5.0
社会的意義を感じる	16.7	10.5	14.3	15.0	10.0	10.0
イメージがよい	0.0	21.1	19.0	20.0	0.0	0.0
社会的評価が高い	0.0	15.8	0.0	15.0	0.0	0.0
収入や地位が安定している	0.0	36.8	19.0	50.0	0.0	5.0
収入がよい	0.0	10.5	19.0	0.0	0.0	5.0
その他	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

表5 現在の職業のいやなところ

単位：％

	N村 農家	N村 非農家	帯 広 非農家	U町 非農家	U町 農家	農業 大学校
いやなところはない	0.0	26.3	14.3	10.0	0.0	15.0
やりがいを感じない	16.7	15.8	23.8	20.0	0.0	10.0
自分の考えが反映されない	0.0	10.5	14.3	25.0	10.0	0.0
努力が報われない	16.7	15.8	19.0	20.0	50.0	10.0
自分にむいていない	16.7	10.5	23.8	25.0	0.0	10.0
仲間とうまくいっていない	0.0	0.0	4.8	10.0	0.0	0.0
仕事がつまらない	0.0	10.5	19.0	15.0	10.0	15.0
仕事がつらい	0.0	5.3	28.6	15.0	10.0	45.0
社会的意義を感じない	0.0	10.5	9.5	0.0	0.0	5.0
イメージが悪い	33.3	10.5	9.5	5.0	50.0	55.0
社会的評価が低い	50.0	10.5	4.8	5.0	40.0	25.0
収入や地位が不安定である	50.0	10.5	4.8	0.0	50.0	15.0
収入が悪い	66.7	36.8	28.6	40.0	70.0	10.0
その他	0.0	10.5	9.5	5.0	0.0	0.0

注) 1：いずれも配表方式のアンケートの回答を集計したもの。以下の表も同様。

2：割合は無回答・無効回答も含めて計算している。

3：重複回答は回答者実人数で除している。

4：回答者はN村農家6人、非農家19人。帯広21人。U町農家10人、非農家20人。

農業大学校20人。

示している。これは、N村の経営主に聞いた農業の良いところとして、社会的に「自由である」とのかいとうにそのまま結びつく。非農家は回答が分散しているが、農村部ではそのなかで「収入や地位が安定している」「仲間が楽しい」が比較的高い割合を示しており、帯広では「魅力を感じない」が最も多く、それに「仕事が楽しい」「仕事が好き」が並んでいる。

つまり、農家の場合自分が関わる主体的な側面に魅力を感じているのに対し、非農家の場合どちらかというと仕事の属性に関わる、多少客観的な側面に魅力を見いだしているといえる。農業大学校生は、農家に近い形であるものの、「魅力を感じない」の割合が他に比べて一番高い。

逆に現在の職業の嫌なところは、表4に見られるように、全体に共通して「収入が悪い」への回答が最も多い。農家の場合この「収入が悪い」への回答率が飛び抜けているとともに、他に非農家では余り回答の見られない「収入や地位が不安定」「社会的評価が低い」「イメージが悪い」への回答が多い。U町の農家では「努力が報われない」が50%を占め、N村との比較で職業に対する満足度の低いことの原因をうかがわせるとともに、魅力としての回答で「努力が報われる」が50%あったこととまっぴらつに割れた回答となっている。非農家の場合はここでも「収入が悪い」以外は分散しているが、「やりがいを感じない」「自分の考えが反映されない」「自分に向いていない」といった回答が農家に較べて多く、農家で魅力として回答のあったことと対象をなしている。さらに、農家にいやなところとして回答の多かった「収入や地位が不安定」「社会的評価が低い」「イメージが悪い」の3項目への回答は、非農家では少ない。また帯広では、「仕事がきつい」が「収入が悪い」に並んでいる。農業大学校生は、「仕事がきつい」と「イメージが悪い」に回答が集中しており、これに「社会的評価が低い」が次いでいる。

ここでは、魅力として農家が主観的側面の強い回答が多かったのに対し、収入やイメージといった客観的な部分に不満が集中していることがわかる。逆に非農家は、客観的な側面に不満はあるとしても農家ほどではなく、むしろ農家では魅力となっていた主観的な側面に不満のあることがわかる。また、ここでも農業大学校生は中間的な傾向を示している。

それでは、職業に対してどのようなことを求めているのかについて表6をもとに考えてみる。まず、発展性か安定性かという設問には、全体的に安定性を指向する回答が多いが、U町の非農家と農業大学校生は両方の指向がかなり接近している。労働時間の短さと収入の多さを比べた場合、農家ではかなり回答が割れているが、

表6 職業に対する考え方

単位：％

	N村 農家	N村 非農家	帯広 非農家	U町 農家	U町 非農家	農業 大学校
発展性より安定性	50.0	73.6	66.7	70.0	50.0	45.0
安定性より発展性	33.3	21.1	33.3	30.0	40.0	55.0
労働時間が長くとも収入	50.0	21.1	19.0	50.0	70.0	70.0
収入よりも労働時間の短縮	33.3	68.4	81.0	50.0	30.0	30.0
仕事よりも余暇	66.7	73.6	90.5	80.0	70.0	80.0
余暇よりも仕事	16.7	15.8	9.5	15.0	30.0	20.0
きつくてもやりがいがあればいい	83.3	84.2	71.4	80.0	80.0	90.0
やりがいよりも気楽さ	0.0	10.5	28.6	20.0	20.0	10.0
職を続けるよりも一ところに住む	16.7	21.1	47.6	25.0	40.0	20.0
どんな所に住もうとも一つの仕事	83.3	73.7	52.4	65.0	50.0	80.0

表7 現在の職業につくにあたっての態度

単位：％

	N村 農家	N村 非農家	帯広 非農家	U町 非農家	U町 農家	農業 大学校
自ら進んで	100.0	52.6	47.6	40.0	70.0	50.0
なんとなく	0.0	26.3	28.6	35.0	10.0	45.0
仕方なく	0.0	10.5	19.0	10.0	20.0	5.0
その他	0.0	5.3	4.8	15.0	0.0	0.0

表8 現在の職業への就職を考え始めた時期

単位：％

	N村 農家	N村 非農家	帯広 非農家	U町 非農家	U町 農家	農業 大学校
子供の頃から	16.7	5.3	9.5	0.0	20.0	10.0
中学在学中	33.3	0.0	4.8	5.0	20.0	20.0
中学卒業時	0.0	0.0	0.0	5.0	20.0	0.0
高校在学中	33.3	52.6	9.5	40.0	30.0	40.0
高校卒業時	0.0	10.5	19.0	25.0	0.0	15.0
大学在学中	16.7	5.3	9.5	15.0	0.0	15.0
大学卒業時	0.0	5.3	19.0	0.0	0.0	0.0
転職に際して	0.0	21.1	28.6	10.0	10.0	0.0

U町を除く非農家は労働時間の短さを指向しており、逆にU町の非農家と農業大学校生は収入の多さを指向している。仕事をとるか余暇をとるかというときには、共通して余暇優先の回答が圧倒的に多い。やりがいや気楽さかというときには、これも共通してやりがい優先されている。住むところを優先するか職業選択を優先するかは、N村の農家、非農家と農業大学校生は圧倒的に職業選択を優先と答えており、U町の農家も職業優先の回答が多いがその傾向は幾分弱いく、帯広の非農家とU町の非農家は両者が拮抗している。

3 職業選択と職業観

では、先にみた職業観はどのように形成されるのか、その背景を探ってみよう。まず、職業選択の経緯から探ってみよう。

表7に職業選択にあたっての態度を見ると、全体に「自ら進んで」への回答が最も多いが、農家ではその割合が特に高くなっている。N村の農家の場合は満足度の高さと結び付いているが、U町の農家の場合不満が多かったことは対照的である。しかし、農業大学校生は「なんとなく」が半数近くを占めている。

次に、表8から現在の職業を意識し始めた時期を見てみると、帯広では高校卒業時以降が大半であるのに対し、農村部では高校在学中以前が半数以上であり、特に農家ではその割合が高いばかりでなく、中学在学中以前の割合も高い。帯広では最終学歴が高く、また転職が多いこともあるが、だとしてもそれだけ最終的な決定に時間を要しているということに変わりはない。

つまり、農家はとりわけ早い時期に自分の職業として農業を、自ら進んで選択していることになる。

表9にみられるように、職業選択の要因としては、「小さい頃から親しんでいた」が農家で80%を超える高い回答率を示しており、また「周囲の人がやっているのを見て」「親しい仲間がやっていた」も、非農家での回答率に比べて多くの回答を得ている。逆に「他に適当なのがあった」は農家でほとんど回答がなく、非農家でのみ多く回答されている。非農家では、共通して「親の勧め」「地元にいながらできるので」「周囲の人の勧め」「他に適当なのがあった」が回答の多い項目となっている。またU町で、農家・非農家とも「地元にいながらできるので」が高い回答率を示していることと、非農家で「親の勧め」が特に高い回答率を示しているこ

とが、N村と比べても大きな特徴的である。

以上のことからすると、農家の青年は小さい頃から家で、また周囲で農業に取り組んでいるのを目の当たりにしながら生活する中で、比較的早い時期に農業を職業として選択しており、それが職業の選択は「自ら進んで」という回答となって現れ、職業選択の時期の遅い非農家で「他に適当なのがなく」決めていることの多いのに対象をなしている。

ただこれは農業を選択した青年の場合であって、U町の非農家回答者は地元の農家の出身者が過半数を占めているばかりでなく、このなかには長男も多い。このような非農業就業者が、農業就業者と同じ環境の中にいながら「親の勧め」がとりわけ大きな要因となって、都市部に比べれば比較的早い時期に非農業に就職を決断していることは、非農家に共通して「周囲の勧め」が高い割合を示していることと合わせて、人的環境の及ぼす影響の大きいことを示している。

では、職業選択に際して、現在の職業にどんなことを期待していたかを表10にしてみる。農家の場合「やりがいがある」「自分の考えが反映される」が圧倒的に多く、なかでも「自分の考えが反映される」は非農家では回答率が高くないのに100%の回答率を示している。ただ、「努力が報われる」はN村では高い割合を示しているが、U町では低く、職業としての魅力でみられたのと同じ傾向がうかがえる。非農家では共通して「収入や地位が安定している」が最も回答数の多い項目となっている。いずれも現在魅力として感じていることとしても多く回答されていた項目である。ただ、非農家でも「やりがい」や「自分の特性が生かせる」という項目は期待として「収入や地が安定している」に次いで回答数の多い項目であるが、それは必ずしも現在の魅力としての回答とは一致していない。これは、職業選択に際して収入といった客観的な要因については事前に評価できるが、「やりがい」などの主観的な要因についてはやってみないと分からない点が多いということを現しているとみらる。それに対して農家にとっての農業のように事前に身近に接することができるような職業であれば、主観的な評価がなされてそれがそのまま魅力となりうることが示されている。

4 居住地の選択と職業観

U町では、現在の職業を考えるようになった要因として「地元にいながらできる

表9 現在の職業を考えるようになった要因

単位：％

	N村 農家	N村 非農家	帯 広 非農家	U町 非農家	U町 農家	農業 大学校
小さい頃から親しんでいた	83.3	10.5	14.3	5.0	80.0	50.0
親の勧め	33.3	42.1	33.3	85.0	40.0	50.0
周囲の人がやっているのを見て	33.3	5.3	4.8	5.0	30.0	20.0
地元にながらできるので	16.7	42.1	28.6	70.0	60.0	35.0
自分で集めた情報	50.0	47.4	19.0	20.0	0.0	15.0
周囲の人の勧め	33.3	47.4	38.0	40.0	10.0	10.0
親しい仲間がやっていた	33.3	0.0	4.8	0.0	20.0	10.0
マスコミの影響	0.0	0.0	4.8	0.0	0.0	0.0
住みたかったところで働けるの	16.7	0.0	23.8	20.0	10.0	30.0
他に適当なのになかった	0.0	42.1	33.3	35.0	10.0	35.0
その他	0.0	10.5	14.3	10.0	10.0	20.0

表10 就職に当たって現在の職業に持っていたイメージ

単位：％

	N村 農家	N村 非農家	帯 広 非農家	U町 非農家	U町 農家	農業 大学校
自分の考えが反映される	100.0	26.3	19.0	5.0	100.0	35.0
やりがいがある	66.7	31.6	28.6	30.0	80.0	70.0
自分の特性が活かせる	33.3	21.1	33.3	15.0	60.0	35.0
努力が報われる	83.3	5.3	4.8	10.0	20.0	35.0
仕事楽しい	0.0	10.5	4.8	5.0	20.0	10.0
仕事が楽である	0.0	15.8	14.3	20.0	20.0	0.0
社会的意義がある	0.0	15.8	14.3	20.0	0.0	25.0
イメージがよい	0.0	21.1	19.0	30.0	0.0	10.0
社会的評価が高い	0.0	21.1	4.8	25.0	0.0	5.0
収入がよい	16.7	21.1	33.3	20.0	0.0	15.0
地位や収入が安定している	0.0	53.2	33.3	55.0	0.0	25.0
その他	0.0	10.5	4.8	5.0	0.0	0.0

表11 いま住んでいる市町村にずっと住んでいる、あるいは選択した理由

単位：％

	N村 農家	N村 非農家	帯 広 非農家	U町 非農家	U町 農家
職業選択の都合	50.0	42.1	28.6	25.0	40.0
仕事上の都合	33.3	31.6	19.0	30.0	40.0
愛着がある	50.0	36.8	42.9	40.0	40.0
住んでいて住み易い	33.3	21.1	42.9	15.0	30.0
親の面倒を見なければならない	16.7	31.6	19.0	20.0	70.0
いま住んでいるところに住みたかった	16.7	21.1	23.8	10.0	30.0
なんとなく	0.0	0.0	0.0	35.0	30.0
親元にいると安心	16.7	31.6	19.0	10.0	10.0
親元を離れたかった	0.0	10.5	4.8	5.0	0.0
以前住んでいたところが嫌いだった	0.0	5.3	4.8	0.0	0.0
移るには不安がある	0.0	5.3	0.0	0.0	0.0
その他	0.0	5.3	23.8	5.0	0.0

ので」が農家、非農家とも高い割合を占めていた。このように、農業という職業と農村という居住地は切り放しがたく結びついている。従って、居住地の選択と職業の選択に付いては、その関連を改めてみておく必要がある。

表11にみられるように、そこに住んでいる、あるいは移らない理由は、いずれにおいても「職業選択の都合」と「仕事上の都合」の、職業上の理由で半数近く以上を占めている。U町の農家の場合、職業選択の要因でも地元志向の強い回答が大半を占めていたので、職業優先の考えと居住地優先の考えが混然となっているが、「親の面倒を見なければならない」という回答がとび抜けて高い回答率になっていることからすると、消極的な居住地優先といえるかも知れない。U町の非農家では、居住地優先の回答が若干職業優先の回答を上回っている。しかしながら、U町では農家・非農家ともに他では回答のない「なんとなく」への回答が30%を超えていることから、積極的な居住地優先ではないことがうかがえる。N村では、職業選択の要因と見比べた場合、農家・非農家とも職業優先の回答が居住地優先の回答を上回っている。帯広では、両者が半数近くできっこうしている。

以上のことから考察すると、都市部の青年では居住地の選択なり職業の選択なりが比較的自由になされているとみられるが、これは職業に対する考え方でみた職業選択を優先するか居住地選択を優先するかが拮抗していたことと符合する。N村では、農業においても非農業においても、積極性のいかんに関わらず職業選択が居住地選択よりも強く意識されている様子が伺えるが、これも職業に対する考え方のところに示されていた結果に一致している。対して雨竜では、居住地選択、それもどちらかという消極的な地元志向から職業の選択が行われている様子がうかがえる。こうした違いが特に農家の場合にN村とU町との間の現在の職業に対する満足度の違いに結び付いていると考えられる。

5 結論

N村の青年農業者層は、周囲で農業が営まれている環境の中で身近に農業という職業に接しながら成長し、農業という職業に自己実現の喜びを見いだして積極的に、しかも早い時期に自分の職業として農業を選択し、収入やイメージに不満はあるものの自己実現の喜びがそれに勝るために、結果的にその選択に満足している、という像が、U町の農業青年や非農家と比べたときに浮かんでくる。対してU町の青年

層は、あるものはN村と同じように早い時期に積極的に農業を選択したことにはなっているが、その背景には「親の面倒を見なければならない」といった回答に代表される消極的な地元指向がより強い要因として隠れていた。しかも、「努力が報われない」といった厳しい経済環境にあるために、経済面やイメージでの不満が前面に出てきている。このような状況の中で農業の魅力として出てくる「自分の考えが反映される」や「自分の特性が活かせる」といった回答は、自己実現というよりは単なる”自由気ままさ”に向けられたものかも知れない。こうした不満が巡りめぐって、同じように農家に育ち農業に接しながらも、親を初めとする周囲の勧めが農業へ向かわせず、しかしながら地元を離れられずに消極的な職業選択が行われていると考えられる。

このように、社会環境の違いが農業者の意識の面に強い作用をおよぼしているばかりでなく、農業の担い手の存在状況そのものとも深い関連のあることがわかった。社会環境の中でもとりわけ経済的条件は担い手の存在状況に強く作用するものであるが、逆に担い手の活動が経済的条件の変革に反作用として働くことを忘れてはならない。この点に、農業に携わる各層の担い手に地域農業・地域活動への参加の機械を積極的に設けているN村での成果が位置づけられるであろう。

また、経済的条件の作用も、親を初めとする周囲の人的環境を通じて担い手へと伝わる部分の大きいことを考えるなら、その作用がどういう経路でどのように担い手におよぼされるかが解明されるなら、経済的条件に反作用を及ぼしていくような担い手の育成に大きな貢献をなしうる。同時に、こうした担い手の経済的条件への働きかけこそ、農業経営学が研究の対象とする主体の重要な側面である。これらは重要な課題であるが、ここではそこまで踏み込めなかった。今後に残された大きな課題である。

おわりに

本稿は、総合開発研究機構の特定課題研究助成「若者の意識・行動と地域活性化」の一環である「北海道の農村における若者の行動と価値観」のなかで行った調査をもとに分析を行った。調査の設定については、北海道大学農学部黒河功助教授、酪農総合研究所松本靖研究員とともにあたった。また、アンケートの実施に当たっては、中札内村では役場の中川博氏、農協の江崎克美氏、北海道畑作経営技術研究所

の新村捷策氏、商工会議所の高嶋重信氏、農協青年部の浅井明博氏雨竜町では役場の水沢隆氏、農業大学校の岡田直樹氏、十勝農協連の鱈場尊氏、帯広市役所の松浦勝範氏など、多くの方々にご協力頂いた。記してここに謝意を表したい。

注：

- 1) 経営組織論を中心とする農業経営学の流れと、その中での主体の取扱いに関しては大泉一貫『農業経営の組織と管理』、1989年、農林統計協会に詳しい整理がなされている。
- 2) 田口三樹夫「農業経営者の思考と行動－転換期の農業経営者論－」（児玉賀典編『農業経営管理論』）、1980年、地球社。武藤和夫「経営管理的意思決定の方法」（児玉賀典編『農業経営管理論』）、1980年、地球社などを参照のこと。
- 3) このような経営主の人格的側面を対象とした研究には天間征「農業の経営者能力に関する研究」（『農業経済研究』第43巻第1号）1971年、日本農業経済学会などがある。